

## まえがき

私には7歳の離れた弟がいます。あるとき、保育園の先生に背負われて帰ってきたことがあります。何やら足を怪我した様子で、包帯を巻いていました。

またあるときは、「ただいま」と言って帰ってきた彼の顎のあたりには、ガーゼが貼り付けてありました。小学生でしたが、清掃中に机と一緒に転んで、机の角で顎を切り、縫ってきたとのこと。

9歳年下の妹は、家の中で一人遊びをしていたとき、ガラスがはまっている障子のガラス部分に勢いよく飛び込んでしまい、手首をガラスで切りました。突然のガラスの割れる音と妹の泣き声に、慌てて2階からかけおりけると、すぐさま手ぬぐいで手首を止血し、腕を上に向けてさせて背負って医者連れていく母がいました。

動揺もせず、無言で淡々とすべきことを行い、わずか数分のうちに家を出た母でした。今でもその光景は脳裏に焼きついています。

子育てとは、こういうことが日常茶飯事のように起こるといふことかと思えます。そしていざというときに、親が子どもを背負うといふことのように思います。

毎日が大変さの連続であり、予期していなかったことが突然起こり、泣いたり、笑ったり、心配したり、安心したりの繰り返しです。

こんな大きなことが起こらないまでも、なかなか親の思っている通りにはいかないのが子育てです。ああ言えばこう言うし、こう言えばああ言う。特に小さい子どもは、本当にじつとしていないし、コロコロ気持ちが変わり、実際に追いかけてはならないこともあるなど、ほとほと疲れてしまいます。

世の中には育児書や教育に関する本がたくさんありますが、子育て真っ最中のお母さんたちは、子育てのノウハウや教育論などを知ることよりも、この大変さを誰かにわかってほしい、受け止めてほしい、共感してほしいと思っっているのではないかと思います。

忙しいご主人たちにはなかなか詳しく報告もできず、あるいは真剣に受け止めてもらえず、自分の中に大変さを一人で溜めてしまっているお母さんもいるかもしれません。自分だけがうまくできない、どうしていつもこうなってしまうのかと落ち込んだり、自己卑下したりすることもあるかもしれません。さらには、こんなことがいつまで続くのかと、うんざりしているかもしれません。

そんなふうに感じたり、思ったりしているお母さんを励ましたいという思いで、この本を書くことにしました。

子育ては、確かに難しい仕事です。教育の現場でも、難しいことはたくさんあります。なぜなら、人を育てることだから、そう簡単ではないのです。だからひと筋縄ではいかないのです。

あのときはその方法で対処できたからといって、今度もその方法で対処できるというものでもありません。

親の葛藤があつてこそ、練られ磨かれて、いいものが生み出されていく、これが子育てなのです。悩んだり、泣きたくなったり、怒ったりといったことが伴うことなのです。もちろん、笑ったり、喜んだり、感動したりもたくさんあります。

もし、落ち込んでいるお母さんがおられたら、「大丈夫です！」。今の状況の中でこそ見えてくるものがあり、次への前進につながっていきます。誰でも泣いたり、笑ったりの繰り返しなのです。もし、今は大丈夫だと思つておられるのなら、ますます子育てを楽しんでください。

子育ては終わるときがきます。子どもは日々、成長していますから。最初の子が生まれたとき、こんなに小さな赤ちゃんがいつになったらどうやって大きくなるのだろうか、想像もつかないと思いました。しかし、確かに大人になり、巣立っていきました。

私がしてきた子育てや、子育ての中で学んだことをこの本でお話することによって、皆さ

んの子育てにエールを送り、応援したいと思います。

私自身は3人の子育てが終わり、今は自分の教室に通ってくるお子さん方に向き合っています。一人ひとり違うということ、けれども一人ひとは尊い存在であるということ、一人ひとりとはとてつもない可能性を秘めているということを見てきましたし、経験してきました。

子育てとは大変な仕事ですが、とても尊い仕事です。宝のたくさん詰まった経験です。そして宝探しでもあり、見つけた宝物を宝箱に入れるようなものだと思います。

今しかできない子育てを、楽しんでほしいと願っています。そして、子どもが成長したとき、その宝箱にリボンをかけて渡してほしいと思うのです。